

《論 文》

日本・中国・台湾¹⁾・韓国の保育者・
教師が抱く葛藤解決方略

塘 利枝子・翁 麗芳・玄 正煥・金 娟鏡

〔問題と目的〕

1. 国家間の葛藤と葛藤解決スキーマ

小競り合いから紛争や戦争、国家間の交渉に至るまで、その規模は様々ではあるが、多くの国々では近隣諸国との葛藤処理に日々明け暮れている。東アジア諸国においても尖閣諸島(中国名: 釣魚島)や竹島(韓国名: 獨島)等の領土問題、慰安婦など戦後処理に関する対応、事件・事故が発端となり、国家間で様々な葛藤が生じている。

国家間の葛藤は、人々の好悪感情にも影響を与える。日本では、中国や韓国に「親しみを感じる」とする人の割合が2013年に比べて2014年では低下しているという(内閣府, 2014)。国家間の葛藤は産業界、教育界、さらに個人の精神面までもにも影響を与え、翻って国家間の葛藤解決をさらに困難にすることもある。政府レベルで様々な交渉を行っているが、すれ違いも多々見られ、なかなかうまく処理できないのが現状であろう。それらの背景にはどのような価値観が存在するのだろうか。

レヴィン(Lewin, 1935)は、葛藤(conflict)を「反対の方向に同時にほぼ等しい強さの力が個体に働く事態」と定義している。またリッカートら(Likert & Likert, 1976)は、「自己にとって望ましい結果を得ようと積極的な努力をすれば、それによって他者の望む結果の獲得が妨げられ、さらには敵意が生じる状態のこと」と定義している。これらの定義を参考にしながら、本研究では、葛藤を「二者間それぞれが望ましい状態を続けようとしたり行動したりする際に、両者の思いや行動が一致せず二者間でいざこざが生じたり、一方が他方の行動や状態に心理的な不満やわだかまりを持っていて、相手のことを受け入れられずにいる状態」と定義した。

葛藤には、大別すると個人内で様々な欲求が同時に存在し、選択できない中で起きる「心理的葛藤」(Lewin, 1935)と、個人間あるいは集団間、もしくは個人と集団との間に対立が生じている状態である「社会的葛藤」(Thomas, 1976)がある。本研究では後者の「社会的葛藤」に焦点をあてる。「社会的葛藤」をさらに分類すると、当事者間で①願望・期待・要求などが異なる利害葛藤、②判断・意見・見解などが異なる認知葛藤、③道徳・正義・倫理などが異なる規範葛藤の3つがあげられており(Thomas, 1992)、本研究では①利害葛藤や②認知葛藤が描かれた作品を題材としながら、それらの基盤となっている「③規範葛藤」について保育者や小学校教師の評価や行動を扱う。

「社会的葛藤」を社会的状況によって分類すると、①対人葛藤、②集団間葛藤、③組織内葛藤の3つに分けられるが、本研究では「①対人葛藤」の題材を取り上げながら、人々が潜在的

に持っている葛藤を顕在化した上で分析するために、教科書に掲載されている作品に登場する「葛藤場面」における主人公の行動への評価という手法を採用する。その手法を、東アジア4ヶ国・地域の「②集団間葛藤」の解決方略の背景に存在する、葛藤解決のための認知的枠組みである葛藤解決スキーマに適用し、比較分析をする。

以上のような社会的葛藤に対する葛藤解決方略は以下の7つにカテゴリー化されている(福島・大淵, 1997)。^①「統合方略」(相互に満足できるような解決策を探る)、^②「懐柔方略」(相手が感情的にならないように配慮しながら自分の願望を間接的に伝えようとする)、^③「分配方略」(積極的に自分側の事情や要求を強く主張して、基本的にはその実現のみをめざす)、^④「攻撃方略」(相手を責めたり脅したりして、心理的、時には身体的に痛めつけようとする)、^⑤「同調方略」(相手の要求に一方的に従ったり、相手の言うとおりにしてしまう)、^⑥「回避方略」(直接の対立を避けたり、葛藤を表面化させずに胸のうちにしまっておく)、^⑦「第三者介入方略」(葛藤の当事者とは別の第三者に自分の応援を頼んだり、葛藤の仲立ちをしてもらう)。以上の7つの解決方略の中でも、本研究では^④「攻撃方略」と^⑥「回避方略」に焦点を当てた。

その理由として2点ある。1点目は、子どもの社会化に影響をもたらす小学校教科書分析の結果、日本では特に「回避方略」が中国、台湾、韓国に比べて特徴的に見られたからである。その一方で、中国では敵に立ち向かうよう期待される「攻撃方略」が教科書に描かれた子どもの姿に特徴的に見られた(塘, 2011)。子どもの保育・教育に携わる保育者や教師が、これらの教科書に描かれた「回避方略」や「攻撃方略」をどう捉えるかを分析することは、子どもの葛藤解決方略についての価値観構築という観点からも重要であろう。2点目は、「攻撃方略」に結びつく可能性のある「直接的主張方略」をとる傾向が、大学生の社会的問題解決方略の日中間比較分析において認められた点である(羅, 2008)。以上のような先行研究をもとに、本研究では特に「回避方略」と「攻撃方略」の2つの解決方略に注目した。

2. 文化・社会内で身に付ける葛藤解決方略

葛藤の解決方略は個人の性格の違いによっても異なる。外向性や協調性といった性格の持ち主は対話などの建設的な解決方略をとることが多く、内向性は離脱といった非建設的な解決方略をとると言われている(Berry, Willingham, & Thayer, 2000)。実際の国際紛争や国家間の戦争開始や回避についても、政治的指導者の心理的特性が反映されるとの指摘がある(Winter, 2007)。また個人的な性格の違いだけではなく、状況によっても葛藤解決方略は異なる。相手が支配的な態度をとることによって、個人のとるべき行動は変わってくる(Lochman, Wayland, & White, 1993; Langer & Winter, 2001)。

さらに文化や社会によっても望ましいとされる葛藤解決方略は異なる。人は生まれてから他者との交渉を通して、それぞれの文化・社会の中で適した葛藤解決方略を身に付けていく。子どもたちはけんかや、学校・学級内のルールを破ったときの処罰や道徳等の授業を通して、葛藤解決方略を学習していく。保育者がどの程度けんかの仲裁に入るかも文化・社会によって異なり(塘・高・童, 2002)、保育者や教師はそれぞれの文化・社会に適した葛藤解決方略を教える重要な役割を担っている。保育者や教師が良しとする葛藤解決方略やその背後にある認知的枠

組みである葛藤解決スキーマは、文化・社会によってどのように異なってくるのだろうか。

3. 小学校教科書に描かれた葛藤解決方略

保育者や小学校教師の価値観や行動とともに、子どもたちの葛藤解決方略に影響を与える教材の一つに教科書がある。教科書は、各国・社会を担う次世代の健全な発達と学習の向上を目指し、教育関係者により作成される公文書であり、その時代の大人達の期待が反映されていると考えられる。塘(2008)は、アジアと欧州の小学校教科書に描かれた葛藤解決方略の特徴について比較分析をした結果、アジアの教科書の主人公は、相手に合わせて自分のやり方や考え方を变えることで問題を解決をする「自己変容型」の傾向が、欧州に比べて多いことを指摘した。また東アジアの中でも、日本と韓国では「自己変容型」が多いが、台湾と中国では自分のやり方をあくまでも貫き通す「自己一貫型」がどちらかと言えば多くなっている。

さらに東アジアの4ヶ国・地域の教科書の内容を質的に分析してみると、それぞれの国が持っている葛藤解決方略は異なり、日本では敵を無邪気に信じるように期待される作品が見られた。一方、中国では敵に立ち向かうよう期待される作品が見られ、韓国では敵がもたらした状況に屈服しないよう期待される作品が見られた(塘, 2011)。以上のような東アジア諸国・地域の教科書に描かれた傾向を踏まえ、本研究では、教科書で取り上げられた作品を材料にして、4ヶ国・地域の保育者や教師の葛藤解決方略についての比較分析を行い、葛藤解決方略の背後にある解決スキーマについて考察することを目的とする。

[方 法]

1. 質問紙に提示された教科書の作品の選出と内容

質問紙の中で葛藤解決方略の事例として提示するために、1980年と2000年に刊行された小学1～3年生用の国語教科書から4作品を選出した。選出の規準は以下の3点である。第1に、4ヶ国・地域の教科書分析の結果(塘, 2011; 塘, 2013)、日本と中国の教科書に描かれた内容が量的²⁾にも質的にも大きく異なっていたことから、日本と中国の教科書の作品を取り上げた。第2に、その中でも起承転結が明確で最後の結末が書かれているものを選んだ。第3に、二者間の対立関係がわかりやすい作品を選んだ。その際に同程度の力関係の二者ではなく、強者と弱者が設定された作品を選んだ。強者の行動については攻撃行動を表出するか否かの2つに分け、弱者の行動は強者の行動に対して回避行動をとるか、対決行動をとるかの2つに分けた。そして強者と弱者の行動の組合せによって、本研究では4作品を取り上げた。各作品の特徴は以下の通りである。

1つ目は、強者の攻撃行動の表出を伴う弱者の回避行動を示す作品である。強者が弱者に対して攻撃行動を示すが、弱者がそれにまったく気付かず、強者に対して無邪気に信頼を寄せることで、強者の弱者に対する攻撃行動を消失させたという特徴を持つ。具体的には日本の小学2年生の教科書の作品『ニャーゴ』(みやにし, 2000)を取り上げた。作品の概要は以下の通りである。猫はねずみにとって怖い存在で猫の姿を見たら逃げるようにと教える授業をさぼった3匹の子ねずみが、突然猫に出会う。子ねずみたちは猫が敵だとは知らなかったため、猫を怖い

とは思わず、猫の「ニャーゴ」という脅すような鳴き声も「こんにちは」と言ったのだと肯定的に解釈をする。そして猫に対して物怖じせずは無邪気に接し、一緒に桃を取りに行くことを提案しただけではなく、最後には自分たちが取った桃を猫に差し出すなど親切にする。猫はそんな子ねずみたちの優しい心に接して、最後には子ねずみたちを食べようという気持ちを失う。

2つ目は、強者の攻撃行動の表出を伴わない弱者の回避行動を示す作品である。強者は弱者に危害を加えようと思っているが、表面的にはまったく攻撃行動を示しておらず、かつ弱者が強者に対して無邪気な信頼を寄せることで、強者の弱者に対する攻撃行動を消失させたという特徴を持つ。具体的には日本の小学2年生の教科書の作品『きつねのおきやくさま』（あまん、2000）を取り上げた。作品の概要は以下の通りである。ある日、住む場所を探していたひよこは、きつねと出会う。きつねはひよこをもう少し丸々と太らせてから食べようと企んでいたが、そんな気持ちをおもてには全く出さずに、ひよこが自分のそばから逃げていかぬよう親切に装う。ひよこは年上のきつねを「やさしいお兄ちゃん」と慕うようになるだけでなく、あひるやうさぎにも「神様みたいな」きつねと紹介し、彼らもひよこの言葉を信じるようになる。きつねはひよこから何度も褒め言葉を言われているうちに、ひよこたちを食べようという気持ちを徐々になくしていく。そしてそれだけではなく、最後にはひよこたちの命をねらったおおかみに立ち向かって、自分の命を落とし、ひよこたちを守り抜く。ひよこたちはそんなきつねのために墓を作り涙を流す。

3つ目は、強者の攻撃行動の表出を伴う弱者の対決行動を示す作品である。強者がいったんは助けを請い弱者の立場を装っていたが、その後、弱者へ攻撃行動を示したのに対して、弱者が徹底的に正面対決をするという特徴を持つ。具体的には中国の小学3年生の教科書の作品『尻尾を振る狼』（人民教育出版社小学語文室編、2000）を取り上げた。作品の概要は以下の通りである。罌に落ちた狼が、その場を通りかかった山羊に犬のふりをして助けを求めるが、山羊は狼が犬ではないことを見抜く。狼は犬のように尻尾を振ることもできると言ってさらに山羊に助けを求めるが、山羊は狼を助けることをあくまでも拒否する。それに対して狼は山羊に悪態をつくが、山羊はさげすむように狼を見て、最後に「あなたはもう長くはないでしょう。きっと獵師があなたをやっつけに来ますから。」と言って、その場を離れた。

4つ目は、強者の攻撃行動の表出を伴わない弱者の対決行動を示す作品である。強者が弱者に対して攻撃行動ではなく、むしろ愛他行動を示したのに、弱者が強者に攻撃行動を示し、恩を仇で返したという特徴を持つ。具体的には中国の小学1年生の教科書の作品『農夫と蛇』（人民教育出版社小学語文室編、1980）を取り上げた。作品の概要は以下の通りである。ある寒い冬の日に、農夫は道で凍える蛇を見てかわいそうだと思い、自分の懷に蛇を入れて温めてあげたところ、蛇はよみがえって農夫を噛み、農夫は毒に当たって死んでしまった。「蛇は人間には有害なやつだから、私がやつをかわいそうと思うこと自体がまちがいだ。」と農夫は言って死んでいった。

表1は、以上4作品の位置づけを示したものである。質問紙には教科書に掲載されている作品のままを載せるようにした。但しあまりにも長い場合には、話の流れを損なわない程度に縮小して提示した。併せて作品内の登場人物の葛藤解決行動への評価と自分自身の行動について、

表1 4つの作品の位置づけ

弱者 強者	弱者	
	強者への回避行動	強者への対決行動
攻撃行動表出あり	『ニャーゴ』（日本）	『尻尾を振る狼』（中国）
攻撃行動表出なし	『きつねのおきやくさま』（日本）	『農夫と蛇』（中国）

4ヶ国・地域の保育者と小学校教師合計342人に質問紙法で選択肢による回答を求めた。作品の内容提示も含めて、すべて各国の言葉に翻訳して質問紙を作製し、日本語と中国語、日本語と韓国語それぞれ両言語に精通している執筆者らによって翻訳及びバックトランスレーションがなされた。

2. 対象者と調査方法

日本、中国、台湾、韓国の4ヶ国・地域の保育者や小学校教師に対して、各国の執筆者らが大学での保育研修会や教師研修会で一斉に質問紙を依頼したり、保育所内で園長を介して質問紙配布を依頼した。また小学校教師の協力でスノーボールサンプリングによる質問紙調査の回答依頼を行った。

質問紙では、強者と弱者それぞれに対する評価、そして自分だったら強者と弱者それぞれと同じ行動をとるか否かについての回答を求め、併せてその理由についても選択肢で求めた。なお選択肢に該当する回答がない場合には自由記述欄に書き込めるようにした。また回答の選択肢については、日本語を母語とする学生に対して2度のプリテストを行うとともに、日本にいる中国人・台湾人・韓国人留学生を対象に面接調査を行い、自由に回答してもらったものを分析した上で設定した。

本論では本調査の質問項目のうち、弱者の行動への評価と、自分は弱者と同じ行動をとるか否か、そしてその理由についての回答のみに焦点をあてて分析を行った。4ヶ国・地域間で比較しながら第三者的に見る「評価」と、当事者になったときの「実際の行動」との回答傾向の関係についても分析した。

〔結果と考察〕

1. 回答者の属性

4ヶ国・地域の回答者の属性は表2の通りである。本研究では男性の回答者が少なかったために、女性の保育者・教師のみを分析対象とした。実際にも4ヶ国・地域では、保育・小学校教育現場で女性が占める割合は高い。日本において、幼稚園では約97%を、小学校では約65%を女性教諭が占めている(文部科学省, 2014, p.60-61, p.114-115)。保育所では約97%(正規の職員・従業者)を女性保育士が占めている(総理府統計局編, 2013)。中国では、幼稚園で96.7%を、小学校では58.6%を女性教師が占めている(台湾教育部, 2015)。台湾では、幼稚園で98.68%が女性の教師, 99.35%が女性の教保員, 小学校では70.50%を女性教師が占めている(台湾教育部, 2015)。韓国では、幼稚園で98.33%を女性教師が(韓国教育開発院, 2015)、オリニジップ(保育所)では95.42%を女性保育者が占めている(韓国保健福祉部, 2015)。このように、どの国・地

表2 回答者の属性

人()内は%

	男 性	女 性	合 計
日本	10(9.80)	92(90.20)	102(100.00)
中国	0(0.00)	66(100.00)	66(100.00)
台湾	11(15.49)	60(84.51)	71(100.00)
韓国	0(0.00)	103(100.00)	103(100.00)
合計	21(6.14)	321(93.86)	342(100.00)

域でも女性保育者・教師が多いという現状を鑑み、本研究においても女性保育者・教師に焦点をあてて分析を行った。

2. 弱者の葛藤解決行動に対する評価

(1) 強者の攻撃行動表出を伴う弱者の回避行動

強者が弱者に対して攻撃行動を示すが、弱者がそれに全く気付かず、強者に対して無邪気に信頼を寄せることで、強者の弱者に対する攻撃行動を消失させたという特徴を持つ『ニャーゴ』において、弱者である子ねずみの行動への評価は表3の通りである。

第1に、日本と台湾では、弱者である子ねずみの行動を「②無邪気で優しい気持ちで接した子ねずみたちはすばらしい」というように、弱者の「無邪気性」を肯定的に評価した人が両国・地域内で最も多かった。中国内では「④無邪気な顔をして、猫の気持ちを変えた子ねずみたちはずるい」というように、弱者の無邪気性を否定的に評価した人が最も多かった。韓国内では「③今回はうまくいったが、あまり人を無邪気に信じるのは軽率」といったように、弱者の「無邪気性」を否定的に評価した者が多かった。日本と同様「無邪気性」を肯定的に評価した人が最も多かった台湾であっても「無邪気性」への肯定的評価は40%未満にとどまっており、日本では4ヶ国・地域の中でも特に「無邪気性」を高く評価する傾向があった。

第2に、合計数の少なかった選択肢①、⑤と⑥を除き、弱者の行動を「肯定的評価」(②に該当)と「否定的評価」(③と④の合計)の2つに分けて χ^2 検定を行ったところ、日本で子ねずみの行動を他国に比べて肯定的に捉える人が有意に多く、中国と韓国では否定的に捉える人が有意に多かった($\chi^2=42.42$, $df=3$, $N=272$, $p<.001$)。なお台湾では肯定的評価と否定的評価が同程度

表3 子ねずみの行動に対する評価

人()内は%

	①うまく猫をだましたのは偉い	②無邪気で優しい気持ちで接した子ねずみたちはすばらしい	③今回はうまくいったが、あまり人を無邪気に信じるのは軽率	④無邪気な顔をして、猫の気持ちを変えた子ねずみたちはずるい	⑤子ねずみたちの行動は良いとも悪いとも評価できない	⑥その他	合 計
日本	2(2.17)	57(61.96)	12(13.04)	4(4.35)	15(16.30)	2(2.17)	92(100.00)
中国	1(1.52)	19(28.79)	16(24.24)	23(34.85)	7(10.61)	0(0.00)	66(100.00)
台湾	5(8.33)	22(36.67)	16(26.67)	10(16.67)	7(11.67)	0(0.00)	60(100.00)
韓国	5(4.95)	29(28.71)	38(37.62)	26(25.74)	1(0.99)	2(1.98)	101(100.00)
合計	13(4.08)	127(39.81)	82(25.71)	63(19.75)	30(9.40)	4(1.25)	319(100.00)

欠損値：2人

であるが、同じ中華圏の中国と比べても有意差は見られなかった($\chi^2=1.89$, $df=1$, $N=106$, n.s.)。しかし日本と比べると日台間に有意差が見られた($\chi^2=13.29$, $df=1$, $N=121$, $p<.001$)。これらの結果から、日本では他の3ヶ国・地域とは有意に異なり、子ねずみの行動を特に肯定的に評価していると推測される。

(2) 強者の攻撃行動表出を伴わない弱者の回避行動

強者は弱者に危害を加えようと心の中では思っているが、表面的にはまったく攻撃行動を示しておらず、かつ弱者が強者に対して無邪気な信頼を寄せることで、強者の弱者に対する攻撃行動を消失させたという特徴を持つ『きつねのおきゃくさま』において、弱者であるひよこの行動への評価は表4の通りである。

第1に、日本では、「①あまりにも他人を信用しすぎて、危なっかしい」という回答が約30%存在するが、「③純粋で無邪気なひよこの行動はすばらしいので、高く評価する」が国内では1位を占めていた。しかしこの作品では「純粋で無邪気」な行動を、中国より高く評価しているとは言えなかった。前述の『ニャーゴ』の子ねずみの行動の無邪気性が日本では特に肯定的に評価されていたのに対して、『きつねのおきゃくさま』のひよこの行動は、日本国内では第1位であったにせよ、「①危なっかしい」という評価とほぼ同じ割合であり、しかも他国と比べても特に肯定的に評価されているとは言えなかった。この2つの作品の違いは、強者から攻撃行動を表出されたか否かの違いである。攻撃行動を強者から表出された場合には、弱者の無邪気性は有効な回避行動だと、日本では捉えられているのではないか。一方、攻撃行動を相手から表出されなかった場合には、弱者の無邪気性は無知から来る回避行動で、むしろ「危なっかしい」と捉えられている可能性がある。すなわち弱者の「無邪気性」に対する評価は、対立する相手との関係性の中で異なることを意味している。

第2に、中国や台湾では「①危なっかしい」という回答が約40%で両国内ではともに第1位を占めた。①の選択肢と、それ以外の項目に分けて4ヶ国・地域間で χ^2 検定を行ったところ有意差が見られ($\chi^2=8.23$, $df=3$, $N=311$, $p<.05$)、日本や韓国よりも「①危なっかしい」という選択回答が有意に多かった。

表4 ひよこの行動に対する評価

人()内は%

	①あまりにも他人を信用しすぎて、危なっかしい	②きつね自身のよさを実は最初から見抜いていたひよこの行動はすばらしい	③純粋で無邪気なひよこの行動はすばらしいので、高く評価する	④無垢な顔をして実は策略家かもしれない	⑤どんな人でも他者を信用するひよこの行動はすばらしい	⑥ひよこの行動は、良いとも言えない	⑦その他	合 計
日本	25(27.47)	8(8.79)	26(28.57)	4(4.40)	14(15.38)	11(12.09)	3(3.30)	91(100.00)
中国	28(45.16)	3(4.84)	20(32.26)	1(1.61)	1(1.61)	9(14.52)	0(0.00)	62(100.00)
台湾	21(35.59)	3(5.08)	14(23.73)	4(6.78)	8(13.56)	9(15.25)	0(0.00)	59(100.00)
韓国	25(25.25)	12(12.12)	5(5.05)	17(17.17)	26(26.26)	11(11.11)	3(3.03)	99(100.00)
合計	99(31.83)	26(8.36)	65(20.90)	26(8.36)	49(15.76)	40(12.86)	6(1.93)	311(100.00)

欠損値：10人

第3に、韓国では、「①危なっかしい」という回答は日本と同程度に見られたが、日本とは異なり「⑤どんな人でも他者を信用するひよこの行動はすばらしい」という回答も特徴的に見られた。韓国以外の国が「信用」行動に10%程度もしくは10%未満しか肯定的に評価していないのに対して、韓国では26.26%の人が肯定的に評価した。そして「③純粹で無邪氣」の評価は、他の3ヶ国・地域とは異なりわずか5%程度にとどまっていた。これらのことから鑑みると、韓国では「無邪氣性」よりも「信用性」に高い評価を置いていると考えられる。「無邪氣性」「信用性」、そしてそれ以外を「その他」の3つに分類して、日韓比較を行ったところ、日韓間に有意差が見られ、日本では「無邪氣性」を、韓国では「信用性」を肯定的に評価していた($\chi^2=19.95$, $df=2$, $N=190$, $p<.01$)。

以上のように中国と台湾では似たような回答傾向になっている。その一方で、日本と韓国では、日本が「無邪氣性」に重きを置いているのに対して、韓国では「信用性」に重きを置いていると言えよう。

(3) 強者の攻撃行動表出を伴う弱者の対決行動

他者への徹底的な正面对決が描かれている作品ではどうだろうか。強者が弱者にいったんは助けを求める弱者の立場を装った後に、翻って弱者へ攻撃行動を示しているのに対して、弱者が徹底的に正面对決をするという特徴を持つ『尻尾を振る狼』において、弱者である山羊の行動への評価は表5の通りである。

第1に、「①狼を助けなくて正解であり、山羊の行動は当然だと評価する」が4ヶ国・地域とも第1位を占めていた。選択肢①と、それ以外の選択肢(②+③+④+⑤)の2つに分類して、4ヶ国・地域間で χ^2 検定を行ったところ有意差が見られ($\chi^2=22.33$, $df=3$, $N=309$, $p<.001$)、中国は4ヶ国・地域で「①山羊の行動は当然」という回答が最も多かった。

第2に、中国と台湾との間で χ^2 検定を行ったところ、両国間に有意差は見られなかった($\chi^2=2.25$, $df=1$, $N=109$, $n.s.$)。中国でも台湾でも強者を助けなかった弱者の行動は当然だと評価する傾向が強いと思われる。一方、日本と韓国では、約30%の人が、強者が弱い立場になった時に助けなかった弱者の行動を「冷たい」と評価しており、その傾向は台湾と比べても有意

表5 山羊の行動に対する評価

	①狼を助けなくて正解であり、山羊の行動は当然だと評価する	②あれだけ狼が頼んでいたのだから、助けたら狼は改心していたかもしれないのに、山羊の行動は少し冷たい	③自分が直接手を下さずに、別の誰かに狼のことを処分させるなんて、山羊はずるい	④山羊はやはり狼を怖がる臆病者だ	⑤その他	人()内は%
日本	52(58.43)	27(30.34)	1(1.12)	2(2.25)	7(7.87)	89(100.00)
中国	55(90.16)	3(4.92)	2(3.28)	1(1.64)	0(0.00)	61(100.00)
台湾	43(71.67)	8(13.33)	0(0.00)	7(11.67)	2(3.33)	60(100.00)
韓国	57(57.58)	26(26.26)	8(8.08)	0(0.00)	8(8.08)	99(100.00)
合計	207(66.99)	64(20.71)	11(3.56)	10(3.24)	17(5.50)	309(100.00)

欠損値：12人

に高かった(日台: $\chi^2=5.39$, $df=1$, $N=130$, $p<.05$; 台韓: $\chi^2=4.08$, $df=1$, $N=134$, $p<.05$)。

第3に、韓国では自由記述の中に「狼に自分のことを証明するようにとチャンスを与えてあげたにもかかわらず、結局は助けてやらなかった山羊はよくない。狼を助けるつもりがなかったのであれば、狼に希望を与えるのはよくない。」「相手が信じるべき人だったのかをきちんと分別したのは賢明であったが、一方相手に期待を与えてしまったのは小さな拷問である。期待だけを与えた。」「助けるつもりがないはずなのに、助けるような行動をとるのは良くない。」などの回答が見られた。前述のひよこの行動への評価と併せて考えると、韓国では信用性や期待を裏切る行為に対しては否定的な評価をすると推測される。日本でも同数程度の自由回答はあったものの、以上のような一定した傾向の回答内容は見られなかった。

(4) 強者の攻撃行動表出を伴わない弱者の対決行動

強者が弱者に対して攻撃行動ではなく、むしろ愛他行動を示したのに、弱者が強者に攻撃行動を示し、恩を仇で返したという特徴を持つ『農夫と蛇』ではどうだろうか。弱者である蛇の行動への評価は表6の通りである。

第1に、前述の3作品とは異なり、日本と台湾が似たような回答傾向を示した。「②蛇の本能だから仕方がない」との回答が両国内でそれぞれ第1位を占めていた。同程度の割合で「③蛇は自分の居場所がわからず恐怖を感じたのだから、蛇の行動も理解できる」が第2位を占めた。②と③の2つの回答選択で両国とも約70%を占めており、蛇の行動に対して同情的であると言えよう。

第2に、中国と韓国では、「①せっかく助けてくれた人に、恩を仇で返すとはひどい」との回答が第1位であった。選択肢①とその他に分けて、日台、日中、日韓それぞれで χ^2 検定を行ったところ、日本と台湾との間には有意差は見られなかったが($\chi^2=2.41$, $df=1$, $N=151$, n.s.), 日本と韓国、日本と中国の間にはそれぞれ有意差が見られた(日韓: $\chi^2=11.33$, $df=1$, $N=190$, $p<.01$; 日中: $\chi^2=14.17$, $df=1$, $N=156$, $p<.01$)。なお、中国と台湾、台湾と韓国、それぞれの間には有意差は見られなかった(中台: $\chi^2=3.837$, $df=1$, $N=123$, n.s.; 台韓: $\chi^2=2.15$, $df=1$, $N=157$, n.s.)。したがって、日本では強者が愛他行動を示したにもかかわらず弱者が攻撃したという行動に対

表6 蛇の行動に対する評価

人()内は%

	①せっかく助けてくれた人に、恩を仇で返すとはひどい	②蛇の本能だから仕方がない	③蛇は自分の居場所がわからず恐怖を感じたのだから、蛇の行動も理解できる	④農夫が蛇を助けた本心が分からない以上、蛇の行動は先手を打つ当然のものである	⑤蛇の行動は、良かったとも悪かったとも評価できない	⑥その他	合 計
日本	14(15.22)	33(35.87)	31(33.70)	3(3.26)	9(9.78)	2(2.17)	92(100.00)
中国	27(42.19)	18(28.13)	17(26.56)	2(3.13)	0(0.00)	0(0.00)	64(100.00)
台湾	15(25.42)	22(37.29)	19(32.20)	0(0.00)	3(5.08)	0(0.00)	59(100.00)
韓国	36(36.73)	22(22.45)	27(27.55)	11(11.22)	1(1.02)	1(1.02)	98(100.00)
合計	92(29.39)	95(30.35)	94(30.03)	16(5.11)	13(4.15)	3(0.96)	313(100.00)

欠損値: 8人

して、一定の理解や同情を示す傾向が中国や韓国よりもあると考えられる。

3. 弱者の葛藤解決行動に対する実際の行動とその理由

(1) 強者の攻撃行動表出を伴う弱者の回避行動

今までは、第三者として弱者の行動に対する評価を求めたが、実際に自分が行動するとしたら回答傾向は変わるのだろうか。弱者の立場に自分自身を投影して、自分が実際にとる行動について回答を選択してもらった。そして前述の評価の回答傾向と自分自身がとる行動とを合わせて考えることで、葛藤解決方略の背後にある葛藤解決スキーマについて考察した。

表7は強者の攻撃行動表出を伴う弱者の回避行動という特徴を持つ『ニャーゴ』の作品の子ねずみだったら、自分の子ねずみと同じ行動をとるか否か、表8は同じ行動をとる場合の理由、

表7 子ねずみと同じ行動をとる割合

人()内は%

	子ねずみと同じ行動をする	子ねずみと異なる行動をする	合 計
日本	37(40.22)	55(59.78)	92(100.00)
中国	53(80.30)	13(19.70)	66(100.00)
台湾	43(71.67)	17(28.33)	60(100.00)
韓国	53(51.96)	49(48.04)	102(100.00)
合計	186(58.13)	134(41.88)	320(100.00)

欠損値：1人

$\chi^2 = 31.57$, $df=3$, $N=320$, $p<.001$

表8 子ねずみと同じ行動をとる理由

人()内は%

	①どんな人にも公平に、優しい気持ちで接したいから	②好奇心が強いので、怖いというより関わりたいから	③ただなんとなく、そうするのが自然だから	④ねこが良い人だと勘違いするから	⑤その他	合 計
日本	9(24.32)	11(29.73)	7(18.92)	7(18.92)	3(8.11)	37(100.00)
中国	18(33.96)	6(11.32)	2(3.77)	27(50.94)	0(0.00)	53(100.00)
台湾	15(34.88)	4(9.30)	5(11.63)	18(41.86)	1(2.33)	43(100.00)
韓国	16(30.19)	17(32.08)	6(11.32)	11(20.75)	3(5.66)	53(100.00)
合計	58(31.18)	38(20.43)	20(10.75)	63(33.87)	7(3.76)	186(100.00)

欠損値：0人

表9 子ねずみと異なる行動をとる理由

人()内は%

	①知らない人にはかかわりたくないから	②知らない人をたやすく信じるのは危険だから	③相手の気持ちを変える自信がないから	④恐怖心の方が強いから	⑤まず相手の出方を見るから	合 計
日本	3(5.45)	20(36.36)	1(1.82)	30(54.55)	1(1.82)	55(100.00)
中国	4(33.33)	7(58.33)	0(0.00)	1(8.33)	0(0.00)	12(100.00)
台湾	3(17.65)	10(58.82)	2(11.76)	2(11.76)	0(0.00)	17(100.00)
韓国	0(0.00)	32(65.31)	2(4.08)	15(30.61)	0(0.00)	49(100.00)
合計	10(7.52)	69(51.88)	5(3.76)	48(36.09)	1(0.75)	133(100.00)

欠損値：1人

表9は異なる行動をとる場合の理由についての回答選択結果を示したものである。子ねずみと同じ行動をとるか否かについては、4ヶ国・地域間に有意差が見られた。

第1に、日本では、前述したように、子ねずみの行動を高く評価した人が多かった。しかし子ねずみと同じ行動をすると答えた人は40%しかいなかった(表7)。さらに子ねずみの「無邪気性」を肯定的に評価している人の傾向を分析すると、子ねずみと異なる行動をすると答えた人は59.65%であった。すなわち子ねずみの行動に対する評価は高いが、自分がいざ実践するとなると、躊躇してしまう人が約60%いたと言えよう。子ねずみと同じ行動をとる理由として「①どんな人にも公平に、優しい気持ちで接したいから」を選択した一方で、「②好奇心が強いので、怖いというより関わりたいから」といったように、あまり深く考えずに子ねずみと同様の行動をとるという回答も見られた(表8)。それに対して、子ねずみと異なる行動をとる人は、「④恐怖心の方が強いから」を50%以上が選択していた(表9)。

第2に、中国では、子ねずみのずるさといったように否定的な評価をした人が多かったが、80%以上が子ねずみと同じ行動をとると述べた(表7)。その理由として「④ねこが良い人だと勘違いするから」との回答が50%あった(表8)。一方、子ねずみとは異なる行動をとる人は、「②知らない人をたやすく信じるのは危険だから」と約60%が回答していた(表9)。思わず勘違いして子ねずみと同じ行動をとってしまうこともあるが、子ねずみの軽はずみさやずるさなども考慮に入れながら、自分がとるべき行動を判断していると推測される。また台湾では、行動とその理由において、中国と同じ傾向を示した。

第3に、韓国では、子ねずみの行動を軽率だと評価したが、自分がとる行動については、同じと答えた人と、異なると答えた人とはほぼ同程度であった(表7)。同じ行動をとると答えた人は、日本と同じ傾向を示し、「②好奇心が強いので、怖いというより関わりたい」や「①どんな人にも公平に、優しい気持ちで接したい」との回答が多かった(表8)。一方、異なる行動をとる場合には、中国や台湾と同様の理由が選択された(表9)。

以上のように中国、台湾、韓国では子ねずみと同じ行動をとる人が過半数存在し、その中でも「どんな人にも公平に、優しい気持ちで接したい」と思っている人は30%程度存在するが、それと同時に子ねずみと異なる行動をとる人の半数以上は、軽はずみに信用する危険性を危惧していることが伺われる。一方、日本では子ねずみの行動の評価については子ねずみの無邪気性を肯定的に評価するものの、実際に自分が行動するとなると怖さが先にたって、その背後にある優しさをおもてに出すことができないと推察される。

(2) 強者の攻撃行動表出を伴わない弱者の回避行動

強者の攻撃行動表出を伴わない弱者の回避行動という特徴を持つ『きつねのおきやくさま』の作品のひよこの立場だったらどうするだろうか。表10は、自分がひよこと同じ行動をとるか否か、表11は同じ行動をとる場合の理由、表12は異なる行動をとる場合の理由についての回答選択結果を示したものである。ひよこと同じ行動をとるか否かについては、4ヶ国・地域間に有意差は見られなかった。

第1に、日本では、前述のひよこの行動への評価では、ひよこの行動の無邪気性と危なっか

しさといったように、肯定と否定とで評価が2つに分かれていた。しかし自分の行動については、ひよこと同じ行動をする人は60%であり(表10)、その理由も「①たとえきつねが敵であったとしても、見た目で判断はできないから」といったように、強者の行動の背景の善意性を信じる気持ちが伺われた(表11)。また自由記述回答においても、「きつねも本当はいい人で、一緒に暮らしたら色々良いところも悪いところもあって好きになれるから」といった回答が見られた。一方、ひよことは異なる行動をとる人は、「④知らない人には慎重に接したいから」という回答を50%の人が選択した(表12)。「①初めて会ったのに無償で優しさをくれる人は、簡単に信じてはいけないと思うから」を選択した人が日本では他国に比べて少なかったことも

表 10 ひよこと同じ行動をとる割合

人()内は%

	ひよこと同じ 行動をする	ひよこと異なる 行動をする	合 計
日本	54(60.00)	36(40.00)	90(100.00)
中国	39(59.09)	27(40.91)	66(100.00)
台湾	35(58.33)	25(41.67)	60(100.00)
韓国	57(57.00)	43(43.00)	100(100.00)
合計	185(58.54)	131(41.46)	316(100.00)

欠損値：5人

 $\chi^2=0.19$, df=3, N=316, n.s.

表 11 ひよこと同じ行動をとる理由

人()内は%

	①たとえきつねが 敵であったとしても、 見た目で判断は できないから	②実際にきつねに 接したら、そのや さしさにだまされ ると思うから	③誰にでも優しい ところはあるので、 自分ならきつねの 気持ちを改心させら れると思うから	④その他	合 計
日本	29(53.70)	15(27.78)	4(7.41)	6(11.11)	54(100.00)
中国	4(10.81)	0(0.00)	32(86.49)	1(2.70)	37(100.00)
台湾	15(44.12)	1(2.94)	17(50.00)	1(2.94)	34(100.00)
韓国	23(40.35)	5(8.77)	26(45.61)	3(5.26)	57(100.00)
合計	71(39.01)	21(11.54)	79(43.41)	11(6.04)	182(100.00)

欠損値：3人

表 12 ひよこと異なる行動をとる理由

人()内は%

	①初めて会ったの に無償で優しさを くれる人は、簡単 に信じてはいけない と思うから	②大きなきつねに 驚いて恐くて逃げ てしまうから	③知らない人には 慎重に接したいか ら	④きつねはひよこ の敵だということ は常識だから	合 計
日本	2(5.56)	14(38.89)	18(50.00)	2(5.56)	36(100.00)
中国	8(30.77)	1(3.85)	11(42.31)	6(23.08)	26(100.00)
台湾	7(28.00)	3(12.00)	12(48.00)	3(12.00)	25(100.00)
韓国	10(23.26)	10(23.26)	17(39.53)	6(13.95)	43(100.00)
合計	27(20.77)	28(21.54)	58(44.62)	17(13.08)	130(100.00)

欠損値：1人

併せて考えると、慎重さは持つものの、見た目だけではなく、その奥にある気持ちを読み取ろうとする傾向があると推測される。

第2に、中国では、日本に比べてひよこの行動の危なっかしさに評価の重きを置いていたが、ひよこと同じ行動をする人は日本と同様に60%近くいた(表10)。しかしその理由は日本とは異なり、「③誰にでも優しいところがあるので、自分ならきつねの気持ちを改心させられると思うから」といった、相手を変えることができるという積極的な姿勢が見られた(表11)。一方、ひよことは異なる行動をとる人は、「③知らない人には慎重に接したいから」と並んで、「①初めて会ったのに無償で優しさをくれる人は、簡単に信じてはいけないと思う」との回答も約30%見られた(表12)。

第3に、台湾では、評価及び同じ行動をとるか否かについては、中国と同様の傾向が見られた。しかし中国と有意に異なる点は($\chi^2=8.40$, $df=1$, $N=71$, $p<.01$)、ひよこと同じ行動をとる理由として、日本と同様に「①見目で判断はできないから」との回答も40%以上選択されていたことである(表11)。一方、ひよことは異なる行動をとる場合には、「③知らない人には慎重に接したいから」という回答が、日本や中国と同様に約半数見られた(表12)。

第4に、韓国では、ひよこの行動の信用性に重きを置いて評価していたが、ひよこと同じ行動をする人は60%近くいた(表10)。その理由は、中国や台湾と同様に、第一位は「③誰にでも優しいところがあるので、自分ならきつねの気持ちを改心させられると思うから」であった(表11)。一方、ひよこと異なる行動をとる人の理由も、中国や台湾と同様の傾向が見られた(表12)。

以上、日本も含めて4ヶ国・地域とも見知らぬ者に接する際には慎重さが大事だという点では同じだったが、日本以外の3ヶ国では、相手の気持ちを変えることができるという可能性をもって相手に接していた。日本では特に外見よりも内面を重視してはいるものの、相手の気持ちを変えようという積極的なところまではないと思われる。

(3) 強者の攻撃行動表出を伴う弱者の対決行動

強者の攻撃行動表出を伴う弱者の対決行動という特徴を持つ『尻尾を振る狼』の作品の山羊の立場だったらどうするだろうか。表13は、自分が山羊と同じ行動をとるか否か、表14は同じ行動をとる場合の理由、表15は異なる行動をとる場合の理由についての回答選択結果を示したものである。山羊と同じ行動をとるか否かについては、4ヶ国・地域間に有意差が見られた。

第1に、日本では、前述した通り、山羊は狼を助けなくて当然だと評価しており、実際にも山羊と同じ行動をする人は過半数見られた(表13)。この回答は、中国や台湾に比べて有意に低かったが(日中： $\chi^2=17.32$, $df=1$, $N=155$, $p<.01$; 日台： $\chi^2=7.73$, $df=1$, $N=151$, $p<.7.73$)、韓国との間には有意差は見られなかった($\chi^2=0.45$, $df=1$, $N=191$, $n.s.$)。日本では山羊と同じ行動をとる人の理由として「②狼の本性がわかったから」との回答が多く見られた(表14)。一方、山羊とは異なる行動をとる人は、「②どんな人であっても改心することはあるので、そのチャンスを狼にあげたいから」と「③自分の誠意をもって接すれば、相手も改心してくれると信じているから」の回答の合計数が80%以上に達しており(表15)、強者の改心といった点に重きを置いてい

る様子が伺われた。

第2に、中国では、狼を助けなくて当然だと山羊の行動を肯定的に評価していた人は90%以上いたが、山羊と同じ行動をすると答えた人も約90%に達した(表13)。その理由として、「②狼の本性がわかったから」との回答が約70%見られた(表14)。台湾でも、中国と同様の傾向が見られた。一方、韓国では、評価についても行動及びその理由についても、日本と類似した傾向を示した。

以上のように山羊に対する評価は日韓と中台とでは異っており、行動についても日韓と中台とでは異なる傾向が見られた。しかし同じ行動をとる理由について、選択肢②とそれ以外に分けて4ヶ国・地域間で χ^2 検定を行ったところ、4ヶ国・地域間で「②狼の本性がわかったか

表13 山羊と同じ行動をとる割合

人()内は%

	山羊と同じ行動をする	山羊と異なる行動をする	合 計
日本	53(58.24)	38(41.76)	91(100.00)
中国	57(89.06)	7(10.94)	64(100.00)
台湾	48(80.00)	12(20.00)	60(100.00)
韓国	63(63.00)	37(37.00)	100(100.00)
合計	221(70.16)	94(29.84)	315(100.00)

欠損値：6人

 $\chi^2=22.32$, df=3, N=315, p<.001

表14 山羊と同じ行動をとる理由

人()内は%

	①自分のことを善良だという人は信用できないから	②狼の本性がわかったから	③狼は仲間の山羊を襲う悪いやつだから	④狼とはこれ以上関わりたくないから	⑤その他	合 計
日本	6(11.54)	25(48.08)	16(30.77)	2(3.85)	3(5.77)	52(100.00)
中国	7(16.67)	29(69.05)	4(9.52)	2(4.76)	0(0.00)	42(100.00)
台湾	10(28.57)	20(57.14)	1(2.86)	3(8.57)	1(2.86)	35(100.00)
韓国	9(14.29)	36(57.14)	8(12.70)	7(11.11)	3(4.76)	63(100.00)
合計	32(16.67)	110(57.29)	29(15.10)	14(7.29)	7(3.65)	192(100.00)

欠損値：29人

表15 山羊と異なる行動をとる理由

人()内は%

	①自分だったらすぐに騙されて助けたいと思うから	②どんな人であっても改心することはないので、そのチャンスを狼にあげたいから	③自分が誠意をもって接すれば、相手も改心してくれると信じているから	⑤その他	合 計
日本	5(13.16)	16(42.11)	15(39.47)	2(5.26)	38(100.00)
中国	0(0.00)	1(33.33)	2(66.67)	0(0.00)	3(100.00)
台湾	2(28.57)	4(57.14)	0(0.00)	1(14.29)	7(100.00)
韓国	5(13.51)	16(43.24)	14(37.84)	2(5.41)	37(100.00)
合計	12(14.12)	37(43.53)	31(36.47)	5(5.88)	85(100.00)

欠損値：9人

ら」という回答に有意差は見られず($\chi^2=4.18$, $df=3$, $N=192$, n.s.), 各国とも他の選択肢よりも多かった。また山羊と異なる行動をとるという人でも, 「②チャンスを与えたい」, 「③相手も改心してくれると信じている」人は, 日本でも韓国同様約 40% ずつ見られた。『きつねのおきやくさま』においては相手を変えられるという積極的な関与が, 日本では他国に比べて見られなかったが, 『尻尾を振る狼』では他国と同様に改心するチャンスをあげたい, 相手を変えることができると思っている。『尻尾を振る狼』は, 最終的には弱者が強者に対して対決行動をとるが, 最初の方では強者が一時的に弱者の立場を装うことが特徴的である。日本では, 最初の段階で強者が弱者の立場を装った点に反応したと推測される。もともと強者であった者でも, 状況が変わり弱者の立場になった時に, 日本は憐憫の情を示すと言えよう。すなわち日本では状況によって相手への対応の仕方を変える傾向があり, それに比べて中国や台湾では状況よりも相手の特性を判断材料にする傾向が日本より強いと考えられる。

(4) 強者の攻撃行動表出を伴わない弱者の対決行動

強者の攻撃行動表出を伴わない弱者の対決行動という特徴を持つ『農夫と蛇』の作品の蛇の立場だったらどうだろうか。表16は, 自分が蛇と同じ行動をとるか否か, 表17は同じ行動をとる場合の理由, 表18は異なる行動をとる場合の理由についての回答選択結果を示したものである。蛇と同じ行動をとるか否かについては, 4ヶ国・地域間に有意差は見られなかった。

第1に, 日本では蛇の本能だから仕方がないと評価した人や, 蛇の行動に一定の理解を示した人が約 70% いたが, 実際の自分の行動では, 蛇と異なる行動をとる人が 75% を占めていた(表16)。蛇と同じ行動をとる人においても, 「①捕まえられたと勘違いして思わず噛んでしまうから」と「②目が覚めたら自分の置かれている状況がわからず, パニックになってしまうから」と答えた人が合計で約 70% おり(表17), 勘違いやパニックを理由にあげている。したがって噛んでしまった行為に強い作為は感じられないために, 前述の評価においても「仕方がない行為」だと捉えていたのだろう。一方, 蛇とは異なる行動をとる人は, 「③農夫は自分を助けてくれた恩人だから」が 50% 以上を占めている(表18)。

第2に, 中国では恩を仇で返すとはひどいと蛇の行動を否定的に捉えている人が日本より有意に多かった。また自分は蛇と異なる行動をとるという人も 80% 以上見られた(表16)。その理由として, 「③農夫は自分を助けてくれた恩人だから」との回答が 50% を占めた(表18)。中国では評価と実際の行動が一致していると言えるだろう。

第3に, 台湾では日本と同様, 蛇の行動に一定の理解を示す評価をしていたが, 実際の行動でも日本と同様に, 蛇と異なる行動をとる人が 75% 見られた(表16)。また日本と同様に, 勘違いやパニックをその理由としてあげた(表17)。蛇と異なる理由についても, 日本と同様に「③農夫は自分を助けてくれた恩人だから」が 50% 以上を占めた(表18)。

第4に, 韓国では中国と同様に恩を仇で返すとはひどいと蛇の行動を否定的に捉える傾向があったが, 自分は蛇とは異なる行動をとるという人は約 80% に達した(表16)。その理由として, 他の3ヶ国・地域と同様に「③農夫は自分を助けてくれた恩人だから」を多くあげていた(表18)。中国同様, 韓国でも評価と実際の行動が一致していると言えるだろう。

表 16 蛇と同じ行動をとる割合

人()内は%

	蛇と同じ行動 をする	蛇と異なる行 動をする	合 計
日本	23(25.00)	69(75.00)	92(100.00)
中国	8(12.12)	58(87.88)	66(100.00)
台湾	15(25.00)	45(75.00)	60(100.00)
韓国	20(20.20)	79(79.80)	99(100.00)
合計	66(20.82)	251(79.18)	317(100.00)

欠損値：4人

 $\chi^2=4.69$, df=3, N=317, n.s.

表 17 蛇と同じ行動をとる理由

人()内は%

	①捕まえられた と勘違いして、 思わず噛んでし まうから	②目が覚めたら 自分の置かれて いる状況がわか らず、パニック になってしまう から	③農夫を噛んで、 農夫が死ねば、 自分はたやすく 自由になるから	④農夫に捕まえ られてしまう危 険性があるので、 自分の身を守り たいから	⑤その他	合 計
日本	10(40.00)	9(36.00)	1(4.00)	4(16.00)	1(4.00)	25(100.00)
中国	3(37.50)	0(0.00)	0(0.00)	5(62.50)	0(0.00)	8(100.00)
台湾	7(46.67)	4(26.67)	0(0.00)	3(20.00)	1(6.67)	15(100.00)
韓国	9(42.86)	2(9.52)	2(9.52)	6(28.57)	2(9.52)	21(100.00)
合計	29(42.03)	15(21.74)	3(4.35)	18(26.09)	4(5.80)	69(100.00)

欠損値：3人

表 18 蛇と異なる行動をとる理由

人()内は%

	①自分を助けてく れたので、農夫を 良い人だと思うか ら	②農夫を噛まず、 まずは冷静になっ て少し様子をみて から逃げようと思 うから	③農夫は自分を助 けてくれた恩人だ から	④その他	合 計
日本	15(22.39)	18(26.87)	34(50.75)	0(0.00)	67(100.00)
中国	6(10.53)	22(38.60)	29(50.88)	0(0.00)	57(100.00)
台湾	10(22.73)	11(25.00)	22(50.00)	1(2.27)	44(100.00)
韓国	25(32.05)	19(24.36)	34(43.59)	0(0.00)	78(100.00)
合計	56(22.76)	70(28.46)	119(48.37)	1(0.41)	246(100.00)

欠損値：5人

以上のように、評価に関しては日台と中韓に分かれ、また評価と実際の行動の一致度についても、日台と中韓とに分かれたが、4ヶ国・地域とも蛇とは異なる行動をとると約80%の人が答えており、4ヶ国・地域間に有意差は見られなかった。そしてその理由として自分を助けてくれた恩人だからとの回答が過半数を占めた。恩という考え方については、4ヶ国・地域間である程度共有されていると推測される。

〔結 論〕

強者と弱者との関係性の中で葛藤が起きた場合の弱者の行動に対する評価と、弱者の立場だ

ったら自分がとる行動について、特徴的な4作品の弱者の行動を材料に、日本、中国、台湾、韓国の保育者・教師の4ヶ国・地域間比較を行った結果、それぞれの葛藤解決方略の背後にある認知的な枠組み、すなわち葛藤解決スキーマについて以下のような特徴を指摘できる。

第1に、日本では回答傾向が、強者と弱者といったその時置かれた状況によって影響される点を特徴としてあげられる。『ニャーゴ』と『きつねのおきやくさま』に見られたように、「無邪気性」の評価の仕方は2作品間の強者の攻撃行動の表出度によって異なっていた。また『尻尾を振る狼』でも強者の状況が一時的に弱者になると、そこに目を向けたのか、弱者の行動を「少し冷たい」と評価していた。一方で、いざ自分が行動するとなると、『ニャーゴ』に見られたように、強者への恐怖心があり、高く評価した「無邪気性」を行動に移すことができず、評価と行動が一致しない傾向が見られた。以上のように、日本では、評価、行動ともに、状況に応じて自分の葛藤解決方略を変えるというスキーマが、他国・地域に比べて多くあると推測される。

第2に、中国では強者と弱者とははっきりと区別されており、その時の状況よりも強者、弱者のもともと持っている特性に目を向けて、判断する傾向があると考えられる。例えば『ニャーゴ』のように、弱者の無邪気性や無知さは時には強い武器となり相手の気持ちを変化させる。しかし、中国では弱者の無知な行動はあくまでも無防備で望ましくないものであり、弱者の「無邪気性」はあまり肯定的に評価されない。また強者がいったん弱者の立場になる『尻尾を振る狼』において、評価、行動ともに、強者が助けを求めても応じずに一貫して強者の「悪い本性」に目を向ける。同様に『農夫と蛇』においても、蛇の行動を恩知らずと否定的に評価し、自分も蛇とは異なる行動をすると回答している。この点でも評価と行動は一致している。以上のように、中国では、状況よりも個人の特性に注目して葛藤解決をするというスキーマが、日本に比べて多くあると推測される。

第3に、台湾では、4作品中3作品で、評価、行動ともに中国と同じ傾向を示した。但し『農夫と蛇』に対してだけは、「仕方がない」「一定の理解はできる」と蛇に同情する傾向が日本と同様に見られた。たとえ自分が蛇と同じ行動をしたとしても、日本と同様「勘違い」や「パニック」を理由にあげていた。台湾では、中国のように個人特性を重視した葛藤解決スキーマが基本的にはあるが、時には日本のような状況を考慮した葛藤解決スキーマを使うと思われる。特に弱者が強者を思わず倒してしまったという状況においては、状況要因を考慮するのではないかと推測される。

第4に、韓国では、作品によって日本と同じ傾向を示すこともあったが、時には中国や台湾と同じ傾向を示したりした。例えば『ニャーゴ』や『農夫と蛇』では中国と同じ評価をする傾向がみられ、『ニャーゴ』、『きつねのおきやくさま』や『農夫と蛇』でも中国と同じ行動をとる傾向が見られた。その一方で、『尻尾を振る狼』では部分的には異なるものの、評価も行動も日本と同じ傾向が見られた。外交のレベルにおいても、日本と中国との間に挟まれて、時には状況要因を考慮し、時には相手の特性を考慮するといった葛藤解決スキーマを使い分けているのではないかと推測される。

以上のように、4ヶ国・地域で葛藤解決スキーマは異なっており、日本ではその時々状況

や、他者か自分のどちらが行うかによってもスキーマが異なるなど、立場をも考慮して解決するという考えを持っている。一方、中国では状況の違いよりは、対立する相手の特性に目を向けて解決するという考えを持っている。台湾や韓国は時には中国的な考えで、時には日本的な考えで葛藤解決を行う傾向が見られた。

隣国であるにもかかわらず、なぜ以上のように葛藤解決スキーマは異なるのだろうか。その理由として、歴史的展開や自然地理的条件、経済発展段階の違いが考えられる。例えば歴史上の侵略、被侵略について、中国は外来民族の侵略や支配を受け、韓国も絶え間なく中国や日本からの侵略を受けてきたが、日本だけは外国の組織的な軍隊に蹂躪された経験を持っていない。その他自然環境における気候や島国かどうかなどの地理的条件も異なる(金, 1992)。また同じ島国でも日本と台湾が背負ってきた歴史的背景は異なる。台湾は日本的なアイデンティティと中国的なそれとの間で揺れており、台湾人としてのアイデンティティを少しずつ確立しようとしている(西川, 2010)ことも影響していると推測される。現在見られる東アジア諸国の紛争や本研究で見られた葛藤解決スキーマの違いは、このような背景にある大きな観点からの分析も今後必要となるであろう。

それでは4ヶ国・地域の葛藤解決スキーマの共通点はないのだろうか。一つあげるとすれば、恩に対する考え方かもしれない。『農夫と蛇』では、蛇と異なる行動をとる理由として「自分を助けてくれた恩人だから」との回答がどの国においても1位を占めた。既に指摘されているように、「恩」は東アジアの漢字文化圏でなじみ深いものである(中村, 1979)。それでは欧米諸国の「恩」とはどのように異なるのだろうか。また東アジア4ヶ国・地域で共通項としてあがってきた「恩」の中味は本当に同じなのだろうか。今後は東アジアが共通して持つ哲学や宗教的背景、4ヶ国・地域の歴史・政治・経済的背景とも関連させながら、各国が持っている葛藤解決スキーマについて分析を試みたい。また本論では「弱者」の行動に焦点をあてて分析を行ったが、今後は「強者」の行動にも焦点をあてて葛藤解決方略をさらに深く分析していく予定である。

* 本研究はJSPS 科研費25380859の助成を受けて刊行されたものである。

注

- 1) 本論では、中華民国の表記を台湾で統一した。また中華人民共和国とは政治・教育体制も異なり、使用している教科書も異なるため、本論では台湾を中国とは別扱いとした。さらに中華人民共和国の表記を中国に、大韓民国の表記を韓国に統一した。
- 2) 2000年に刊行された日本、韓国、台湾のすべての教科書、そして中国では小学校教科書として最もよく使用されている人民教育出版社の1～3年生用の国語教科書の作品から、一定の基準のもとで選出された合計667編(日本154編、韓国135編、台湾290編、中国88編)の作品に対して内容分析を行った。その結果、葛藤解決場面における解決方略において日本と中国との間で有意に異なる傾向が見られた。詳細については塘(2013)を参照のこと。

参考文献

あまんきみこ 2000 きつねのおきやくさま 木下順二・今西祐行他33名編 国語2下 教育出版 4-12.

- Berry, D.S., Willingham, J.K., & Thayer, C.A. 2000 Affect and personality as predictors of conflict and closeness in young adults' friendships. *Journal of Research in Personality*, **34**, 84-107.
- 福島治・大淵憲一 1997 紛争解決の方略 大淵憲一編著 紛争解決の社会心理学 ナカニシヤ出版 32-58.
- 韓国保健福祉部 2015 保育統計2014 保育政策課出版物 http://english.mw.go.kr/front_eng/index.jsp (検索日：2015年10月18日).
- 韓国教育開発院 2015 教育統計サービス 2015年教育統計年報 <http://eng.kedire.kr/khome/eng/webhome/Home.do> (検索日：2015年10月18日).
- 金日坤 1992 東アジアの経済発展と儒教文化 大修館書店.
- 人民教育出版社小学語文室編(中国) 1980 農夫と蛇 国語第2冊(1年生) 人民教育出版社 112.
- 人民教育出版社小学語文室編(中国) 2000 尻尾を振る狼 国語第5冊(3年生) 人民教育出版社 156-158.
- Langer, C.A., & Winter, D.G. 2001. The motivational basis of concessions and compromise: Archival and laboratory studies. *Journal of Personality and Social Psychology*, **81**, 711-727.
- Lewin, K.A. 1935 *Dynamic Theory of Personality*, McGraw-Hill. (K. レヴィン 著 相良守次, 小川隆訳 1957 パーソナリティの力学説 岩波書店).
- Likert, R. & Likert, J.G. 1976 *New ways of managing conflict*, McGraw-Hill. (R. リッカート・J.G. リッカート 著 三隅二不二監訳 1988 コンフリクトの行動科学：対立管理の新しいアプローチ ダイアモンド社).
- Lochman, J.E., Wayland, K.K., & White, K.J. 1993 Social goals: Relationship to adolescent adjustment and to social problem solving. *Journal of Abnormal Child Psychology*, **21**, 135-151.
- 羅蓮萍 2008 社会的問題解決の方略と目標：中国と日本の大学生における比較分析 東アジア研究 **6**, 39-55.
- みやにしたつや 2000 ニャーゴ 山口明徳・渡辺富美雄他33名編 新訂新しい国語二上 東京書籍 48-55.
- 文部科学省 2014 平成26年度学校基本調査報告書(初等中等教育機関 専修学校・各種学校) 日経印刷 60-61, 114-115.
- 中村元 1979 「恩」の思想 仏教思想研究会編 仏教思想4 恩 平楽寺書店.
- 内閣府 2014 外交に関する世論調査報告書(平成26年10月調査) <http://survey.gov-online.go.jp/h26/h26-gaiko/2-1.html>.
- 西川潤 2010 序章 西川潤・簾新煌編 東アジア新時代の日本と台湾 台湾研究叢書4 明石書店.
- 総理府統計局編 2013 平成22年国勢調査報告：職業等基本集計結果 統計センター.
- 台湾教育部 2015 2014年度性別統計指標彙總性資料-教職員
<http://www.edu.tw/pages/detail.aspx?Node=3973&Page=27880&WID=31d75a44-efff-4c44-a075-15a9eb7aecdf>
(検索日：2015年10月20日).
- Thomas, K.W. 1976 Conflict and conflict management. In M.D. Dunnette (Ed.), *Handbook of industrial and organizational psychology*. Chicago: Rand McNally. pp.889-935.
- Thomas, K.W. 1992 Conflict and negotiation processes in organizations. In M.D. Dunnette & M.H. Leaetta (Eds.), *Handbook of industrial and organizational psychology, Vol.3(2nd ed.)*. Consulting Psychologists Press. 651-717.
- 塘 利枝子 2008 教科書に描かれた発達期待と自己 岡田努・榎本博明(編著) 自己心理学5『パーソナリティ心理学へのアプローチ』8章 金子書房 148-166.
- 塘 利枝子 2011 東アジアの教科書に描かれた自己表出 榎本博明編著『自己心理学の最先端：自己の構造と機能を科学する』あいり出版 241-254.
- 塘 利枝子 2013 東アジアと欧州の教科書に描かれた「いい子」像 安藤寿康・鹿毛雅治編 教育心理学：教育の科学的解明をめざして 慶應義塾大学出版会 273-276.
- 塘 利枝子・高向山・童昭恵 2002 日本・中国・台湾の保育者が期待する子ども像：子どもの「はずれた」行動への保育者の対応に焦点をあてた予備考察 平安女学院大学研究年報 **3**, 57-68.
- Winter, D.G. 2007 The role of motivation, responsibility, and integrative complexity in crisis escalation: Comparative studies of war and peace crises. *Journal of Personality and Social Psychology*, **92**, 920-937.

Keywords：小学校教科書，葛藤解決スキーマ，アジア，文化間比較